自己肯定感を高める指導の一試み

―自分の進路に夢と自信を育てる学習指導を通して―

（研究者）仙台市立黒松小学校　加藤富久子
（発表者）　　同上

Ⅰ　はじめに

1　主題設定の理由

第 17 期中央審議会答申は,「初等教育と高等教育との接続の改善について」のなかで，学校と社会及び社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要があると述べている。しかし，小学校でのキャリア教育への関心は薄く先行文献や小学校での実践例は極めて少ないのが現状である。今まで小学校で行ってきた進路指導は，卒業を間近に控えた６年生を対象に行われるものが主であり，低学年から系統立てて行っていくのは非常に難しい。また，各種報告等では，意思決定能力の不足，人間関係をうまく築くことができない，自己肯定感をもてない，将来に希望をもつことができない，進路を選ぼうとしない等々といった子ども達が増えていることが指摘されているが，一方では働くことや生きることに対する子ども達の関心，意欲は低下しておらず，潜在的な資質や能力が高いことを裏付ける事例も見られる。

自己実現に向かってねばり強く努力する目的意識の弱さが懸念される今日，進路指導は小学校６年生にだけ行われるものではなく，小学校低学年から意図的，計画的に実践していくことが大切であると考えた。児童が将来のことを考える適切な機会や場を設定し，指導内容や方法等に工夫を行うことで，児童が自己を見つめ，他者とのかかわりをとおして，自分の将来を考えようとする態度をはぐくんでいきたいと考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

児童が，自らのよさを認識しながら自己肯定感を高める指導方法について，自分の進路に夢と自信を育てる学習活動の実践を通して探る。

Ⅲ　研究の内容

昨年度は，児童に自己のよさを認識させることに重点を置き，将来の夢や希望を身近な人に「夢発信集会」で伝える実践を行った。「自分が将来何になりたいのか，どんな道を進んでいきたいのか」という視点が明確になるにつれて自己への自信をはぐくみ，さらに自己肯定感も高まっていくことがわかった。

今年度は第５学年児童を対象として「自分のよさを知る」「尊敬する人から生き方を学ぶ」「達人から生き方を学ぶ」の三つの柱を立てて，自分の将来を考えながら自己肯定感を高める指導を試みた。

1　各種実態調査と分析，その考察

(1)　調査目的

児童の自己肯定度の度合い，児童の進路に関する意識，保護者のわが子への期待などについての実態を把握し，研究の基礎資料とした。

(2)　調査対象者

仙台市立黒松小学校　第５学年１組
児童 32 名及びその保護者 32 名

(3)　調査方法　質問紙法　多肢選択法（一部記述）

(4)　調査結果の考察(一部抜粋)

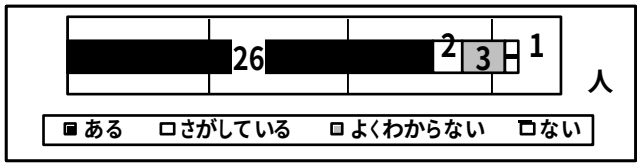


図１　将来の夢や希望　５月（児童 n=32）

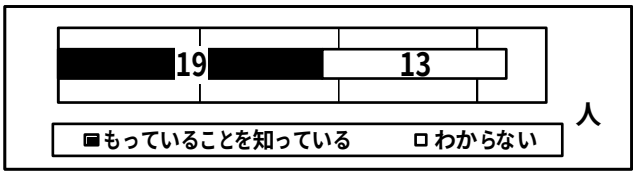
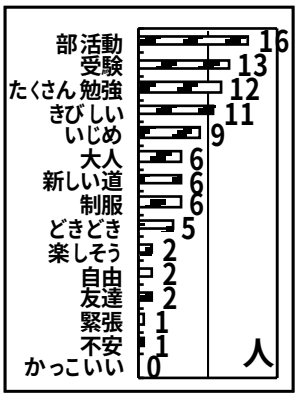


図２　我が子は夢をもっているか (保護者 n=32)

５年生になったばかりの５月の段階で，既に７割の児童が将来の夢や希望をもっていると答えていた。しかし，保護者の方には「もっていること

はわかるがそれが何であるかはわからない」「聞いたことがない」という答えが多く見られた。また，図３や図４からは児童が中学校に対して勉強や部活動などの厳しさをイメージしながらも，楽しくて自己を成長させてくれるところであると期待している様子をうかがうことができる。



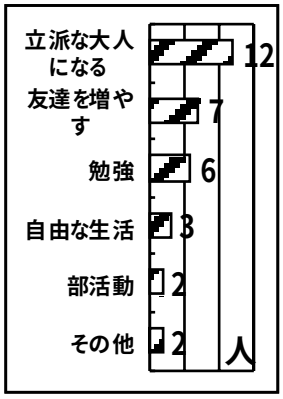


図３ 中学校のイメージ　図４ 中学進学の目的

2　自分の将来に夢と自信を育てる学習指導の実践

(1)　実践授業の計画

①　対象者　仙台市立黒松小学校　５年１組

②　期間　　平成 15 年４月～12 月

③　題材名　夢に向かって (学級活動)

(2)　職業的(進路)発達にかかわる四つの領域と学習プログラムの関連

表１ 進路発達にかかわる諸領域とのかかわり

領域	具体的な活動
人間関係形成能力	・自己目標づくり **[実践 1]** ・自分の長所や欠点に気付き，自分らしさを発揮する。また，友達の個性を認め尊重する。**[実践 2]** ・自分の趣味や関心，特技，将来の夢などついて話す。
情報活用能力	・身近な人，仕事についていろいろな情報を収集するなかで，働くことの意義を知る **[実践 3]**
将来設計能力	・将来のことを考える大切さがわかる。 ・憧れとする職業をもち，今，しなければならないことを考える。**[実践3]**
意思決定能力	・さまざまな活動の中で自分のやりたい係，やれそうな係を選ぶ。

(3) 自己肯定感を高めるための目標づくり[実践 1]

毎日の生活において，個人目標（到達目標）と到達できた時の予想される気持ちを書かせた。はじめは「勉強をがんばる」「仕事をする」といった抽象的な目標が多かったが，自己のよさをつかみ始めると，そのよさが発揮できるような目標が記入されるようになった。また，週末には個人目標に対する取組を友達から評価してもらう時間を設定した。友達と努力の様子を認め合うことは，児童の自己肯定感を高めるために効果的であった。

(4)　自己のよさに気づかせる工夫 [実践 2]

肯定的な自己理解をすることで，将来の夢や希望，展望をもつことができると考え，自己のよさを肯定的に認める感情をはぐくむための意図的，計画的な指導過程を工夫した。自己のよさがわからないと答えた約８割の児童も，自己のよさを認識し自分に自信をもつことができた。さらには将来への夢や希望に対する自己実現への可能性をもちながら，自己肯定感も高めていくことができた。

(5)　大人から生き方を学ぶ場の設定　[実践 3]

児童は大人から話を聴いて，その人の考え方や生き方を学ぶという体験が少なく，将来の夢に関しても何の苦労もなく実現できるものと簡単に考えがちである。しかし，素晴らしい音楽や演劇などに出会った時は素直にそのよさを認めて感動し，自分も真似したい，近づきたいというような思いをもったり，その分野に強い興味をもったりする。これは，自分なりに価値を見いだし，心が揺り動かされることによって強い興味を示すのだと考える。児童の心を揺り動かすために自分が尊敬する人や元プロ野球選手に出会って，その人の生き方や考え方にふれる体験の場を設定した。現在の学習や生活を大事にしながら，さらには将来の夢や希望の実現に向けても，前向きな姿勢で努力していきたいという好ましい感情をはぐくむことができた。

Ⅳ　研究のまとめ

児童の自己肯定感を高めるために，進路指導的な側面からその指導の工夫を行っていくことは，大変効果があることが分かった。小学校で行う進路指導には「中学進学」と「将来の生き方，在り方」を考えさせる二つがあると考える。小学校においては，中学校で学ぶ進路指導につなげるための豊かな基盤作りが必要である。自己理解を深め，豊かな資質や可能性を引き出し，伸ばしていこうとする気持ちをはぐくむために，多くの他者とかかわらせながら将来の自己の生き方や在り方を見つめ，考えさせる指導を今後も続けていきたいと思う。